

Title	イル汗国時代のペルシア陶器に現われた中国的装飾と装飾技法について
Sub Title	The Chinese elements on the decoration of the fourteenth century Persian pottery
Author	三上, 次男(Mikami, Tsugio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1971
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.44, No.1 (1971. 11) ,p.25- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集東西交渉史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19711100-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イル汗国時代のペルシア陶器に 現われた中国的裝飾と裝飾技法について

三 上 次 男

一三世紀の中期から一四世紀の後期にかけて、ペルシアはイル汗国（一二五八—一三九三）の支配をうけた。この国はいうまでもなく、広くアジア全域にわたって支配の手をひろげた蒙古帝国の一部を構成していたから、この汗国の時代には、東アジアと西アジアの交通も、他の時代にくらべて、より容易であり、そのようなこともあって、文化の交流も活発であったといわれている。そのことは美術工芸の面にもよく現われていて、この時代は製作技法やデザインの上で中国とペルシアが相互に影響しあった。

陶磁器の場合もこのことはいえるのであって、イル汗国時代のペルシア陶器と元時代の中国陶器の間には、つよい相互影響関係がみられるのである。

その一例として、イル汗国時代のペルシア陶器のデザインや裝飾技法の上に現われた中国的要素の一・二について考えることにする。

二

ペルシアの地は、イスラム陶器の部門において、とくに重要な地域であつて、ペルシア陶器は質の上でも生産量の点でも、つねに他の地域のそれをぬきんでていた。まさしくイスラム陶器中の先進地帯であつたのである。ペルシア陶器の称が、イスラム時代のペルシアで生産された陶器をさすばかりでなく、ときにひろくイスラム陶器全般の代名詞として使われるのはそのためである。⁽¹⁾

八世紀の後期から、独自の性質を誇るイスラム陶器の一つとして登場したペルシア陶器は、おおよそ初期・中期・後期の三期に分けることができる。初期はだいたい八世紀末から一〇世紀、中期は一一世紀から一五世紀、後期は一六一一八世紀である。

すなわち、初期はアッパス朝の盛時を中心とした時期、中期はセルジुक帝国・イル汗国・ティムール帝国のそれを含み、後期はサファヴィ王朝を軸とした時代であるが、どの時期の陶器も中国陶磁と諸種の技法・形態のうえで、深い関係をもっている。⁽²⁾たとえば中期のうちの第一期であるセルジुक陶器は、中国の宋代陶磁と器形・釉色・製作技術・裝飾技法ともに類似点が多い。しかし、この時期にはデザインの点では影響関係をみることも多くはない。その点この稿の主題であるイル汗国時代の陶器ではどうかであろうか。それには、まずペルシア陶器の中期第二のイル汗国時代の陶器の特色について述べておかなければならない。

三

セルジुक帝国の時代、ペルシアにおける陶器の生産地としてはレイ、サーヴェー、カシャーなど重要で——その

他ニシャプールやゴルガンなどもあった——、これらの地では青釉陶器・ラスター陶器・ミナイ陶器など精巧なさまざまの陶器が作られていたが、イル汗国時代になると、サーヴェーの西方に新らしく建設された都市のスルタナバード近郊に多くの窯場ができ、窯業生産の中心は、この地区に移った。セルジュク時代のカシャーン・レイ・サヴェーの三窯のうちレイやカシャーンの衰微はとくに甚だしかったようである。これはこの世紀の初期のモンゴル軍のペルシア諸都市破壊の結果であつて、それに伴い、セルジュク時代に生産された精巧で繊細な陶器はしだいに影をひそめ、それに代つて素地・器形・裝飾技法・色調、さらにはデザインなど、ともに前代とちがったイル汗国時代に特長な陶器があらわれたのである。精緻な上絵付をほどこしたミナイ陶器の技法をうけつぎながら、これとは別個な色調や裝飾技法を生みだしたラジュバルディナ陶器（青地金彩上絵陶器）や、高台の高い鉢の内面に、数種の青釉をつかつて精細な模様を分割的にえがいた白地青釉彩画陶器、口縁部の幅広い鉢や広口の瓶の上に盛り上げ技法による模様をほどこした青釉白盛上文陶器——いわゆるスルタナバード陶器——などは、その代表的なものである。³⁾この時代の陶器の模様は、一般に細かい花鳥・幾何・文字などの諸模様で、くまなく空間を埋めつくす様式が盛行しているが、これに使われるデザインにも他と異なるものがある。そうして、その一つに花卉鳳凰文があり、また多瓣蓮花文²⁾鎬文もある。それらのうちまず初めの花卉鳳凰文を例示すると次のようなものがある。

四

図版第一、A図は、イル汗国時代の標式的陶器の一つである淡青釉をかけた白盛上花鳥文の鉢である。製作されたのはスルタナバード窯、時期は一三世紀後期から一四世紀前半であろう。器形は、まるい素直なカーブをもった胴部に、やゝ内にかたむいた高目の高台をつけた鉢で、口縁部も、胴部の延長のような形で、立ちあがったまゝすっきりと終っている。

全体の形は中国の宋・元時代の丸い鉢か、わが国の平安・鎌倉時代の漆器の丸碗を思わせる。⁽⁴⁾

この器の内外には華麗な模様がほどこされているが、それはまず白土で図柄を盛りあげながら作り、その上に黒や暗緑色の線で細かく輪郭や細部をえがく。そうして最後にこれを淡青釉でおおうと、盛りあがった白土のデザインがあわく青釉下に浮びあがって、静かなうちにも立体的な感じを与えるのである。

この鉢の内面の模様は特長がある。見込の中心部にえがかれた花形を軸として、流麗な草花模様が水草のように四方にひろがり器面をうずめているが、その間を翼をひろげた四羽の霊鳥がたがいに後を追いつながら飛んでいる。するどい嘴ときびしく大きな眼、それに大きな冠羽や長い尾羽など、この鳥はまさしく中国という鳳凰であり、後に述べるように、中国、ことに宋元時代に流行した鳳凰文様をただちに思いおこさせる。

いま一つの例をあげよう。図版第2、A図は、同じように一三世紀末から一四世紀前半にかけて、スルタナバードで作られた淡青釉白盛上花鳥文把手壺である。この壺の器形は、まるく張った胴部の上に短い頸部と広い花口の首部がつゞく水差し形であって、首部と胴部の肩とは把手でつながれている。この様式の陶器としてはあまり多くない器形である。⁽⁵⁾

装飾技法は、前に例示した鉢と同じように盛上げ技法で模様をあらわしているが、この壺の場合もまた胴部に、花卉の間にあそぶ飛鳳が四羽、窓形の変形パルメット文様を挟みながら、描きめぐらされている。同様の花文は首部にもある。

ただ、変形パルメット文を併用したこの壺のデザインでは、飛鳳文も、花卉文も、前にあげた鉢にくらべると、かなり簡略化され、便化している。このことはあらかじめ心にとめておかなければならない。

なおこの壺では、胴部の下方を花瓣状の模様をつらねた一種の多瓣蓮花文で飾っているが、これについては後にあらためて述べる。

スルタナバードで生産された盛上文様式の陶器の模様にあられた四羽の花卉飛鳳文は、右にあげた二形式にとどまら



第1図 淡青釉白盛上人物鳳凰文深鉢
(スルタナバード窯) 14世紀

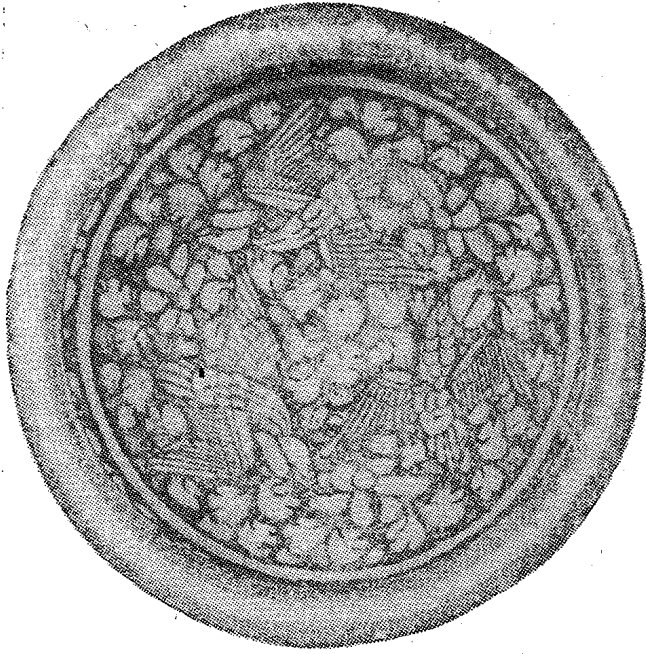
れぞれ一羽の鳳凰を花卉とともにおさめた盛上形式の図柄がある。そのような場合、鳳凰はにぶく便化して鴨のようになり、見え見え。

そこでこれを整理すると、盛上げ形式の図柄が鳳凰と花卉のみで構成されている場合は、鳳凰文もおおむねより写実的である。これに対し、鳳凰が何らかのイスラム的なデザインによって距てられている時、飛鳳の形式はより便化し、変形し、にぶくなっていると考えてよからう。形式学的に言えば、一般に前者のデザインが、後者より早い時期に現われたで

ない。

鉢の場合、見込の中央に人物(挿図1) 兎、鹿などを花模様とともに円中におさめ、その周辺の胴部に四羽の飛鳳をめぐらしているものがある。その際の四羽の飛鳳は、それぞれ、窓形にまとめられたパルメット形花模様によって距てられたものと、そうでないものがある。右に挙げた兎図は後者である。この両者をくらべると、窓形花文によって区切られていないものの方が、区切られたものより、鳳凰の形態はより整っている。いいかえると、前者の鳳凰の模様はすこぶる便化していて形式的な存在にすぎなくなっているのである。

イル汗国時代のペルシア陶器に現われた中国的装飾と装飾技法について



第3図 淡青釉白盛上花卉鳳凰文深鉢
(スルタナバード窯) 14世紀前半



第2図 淡青釉白盛上花卉
鳳凰文壺 (スルタナバード窯)
14世紀前半

あろうことはいうまでもない。

盛上文形式の陶器につけられた鳳凰の数は四羽の場合が圧倒的に多い。しかしその他の数の場合もあるのであって、見込の中央に花卉模様にかこまれて、唯一羽飛ぶものもあり、あるいはアルバロス形の壺(挿図2)にみられるように、花卉とともに二羽の鳳凰をえがいたもの、さらには三鳳(挿図3)のものもある。三者とも鳳凰と花卉ばかりであり、その場合の鳥形はだいたい写実的である。

同様のことは、挿図第2にあげた壺の場合についてもいえる。アーサー・レーンの「後期ペルシア陶器」図版1にあげた壺には胴部に花卉とともに四羽の鳳凰があしらってあるが、この場合の鳳凰はより写実的である。

五

盛上様式の装飾技法によって飾られたスルタナバードの陶器につけられた文様は、ただ花卉鳳凰文ばかりではない。見込に花卉とともに人物のえがかれているものもあれば、兎と花卉⁽¹²⁾・鴨と花卉⁽¹³⁾・豹と花卉⁽¹⁴⁾・孔雀と花卉⁽¹⁵⁾・鹿と花

卉⁽¹⁶⁾などを組合せたものもあり、あるいは幾何文の中に花卉をうずめたものも知られている⁽¹⁷⁾。これらはどれも興味ある図柄であり、ペルシアの伝統的デザインとしての要素がつよい。

しかし全般的に見る場合、この種のスルタナバード陶器では、花卉鳳凰文で飾ったものが数量的にもっとも多く、この文様は、スルタナバード陶器の特長的なものとさえいえる。

後に触れるように、盛上装飾様式はスルタナバード窯で作られたばかりでなく、東北イランのジョベイン (Jovain) でも作られていることが最近になってわかった。そうしてジョベイン窯はスルタナバード窯に先行するように思われるが、ここでは鳳凰文は存在しない。スルタナバードの盛上装飾様式の陶器を飾る鳳凰文は、イランではスルタナバード窯以前には現われないのである。すなわちスルタナバード窯時代になってはじめて現われたデザインであったといえる。それではこれはこの時代に至ってイランで新しく創作されたデザインかというところ、それはそうではなからう。これとまったく同じデザインが、中国に存在し、しかもそれは八世紀の唐代いらい中国で愛用された図柄であったからである。

六

中国で、明らかにいわゆる鳳凰と認められる鳥形の図柄のあらわれるのは戦国・漢時代からであるが、吉祥の意味も加わったこの図柄は、その後発達し、唐時代に至ると、円形の輪廓の内部に一羽あるいは数羽の鳳凰が、花文を背景に飛翔する模様がつくられた。そうしてその模様は諸外国にも伝わっている(挿図4)。それは五代をへて宋・元の時代になると、ますます愛用され、陶磁器・漆器・織物などを飾る模様として使われた。

いま陶器にえがかれた円形輪廓中の鳳凰図をあげると、これはまず唐三彩にあらわれている。しかし、その場合、鳳凰



第4図 鍍金. 蓋付水滴 法隆寺献納宝物

は一羽の場合が普通で、花文も発達せず、花文は浮雲のようにもみえる(例えば白鶴美術館蔵の唐三彩鳳首壺の胴部の貼付模様⁽²⁰⁾)。

ところが一〇世紀、すなわち五代・宋初の時代になると、花中に飛翔する双鳳をえがいたデザインがあらわれる。それを描いた適例は、五代の越州窯の線刻あるいは浮彫の双鳳文である⁽²¹⁾。そこでは冠羽をもち、するどい嘴と眼をもった鳳凰が羽翼をひろげ、尾羽を長々と伸ばしながら、たがいに他を追う形で飛んでいる。この図形はすでにスルタナバード陶器の鳳凰文と相通ずる。ただ背景をなす花卉文の茎は唐草状につらなり、その間を花と葉でうずめて、たいへん写実的である。

時代の吉州窯⁽²³⁾でも使われている。たゞ宋時代の陶磁の紋様としては、さして多用されたとはいえない。

ところが一三世紀の後半から一四世紀の前半にかけての時代、すなわち南宋後半・元時代には、花卉鳳凰文は再びさかんに陶磁器の模様として使われるようになる。とくにこれは陶磁を彩画で飾る白地黒彩の磁州窯系陶器(絵高麗)と白磁青花(染付)に現わる度合が多い。

挿図五は磁州窯の白地黒彩壺(絵高麗)であるが⁽²⁴⁾、この壺に描かれている花卉鳳凰文の場合、花模様はすでに写実性を失い、渦状文の集団として現わされている。この描法はスルタナバード陶磁の花文とすこぶる類似する。しかし鳳凰は各部とも大して省略されることなくえがかれており、力がある。いずれにせよ、この壺にえがかれた花卉鳳凰文は、図版一



第5図 磁州窯白地黒彩鳳凰文壺 元時代



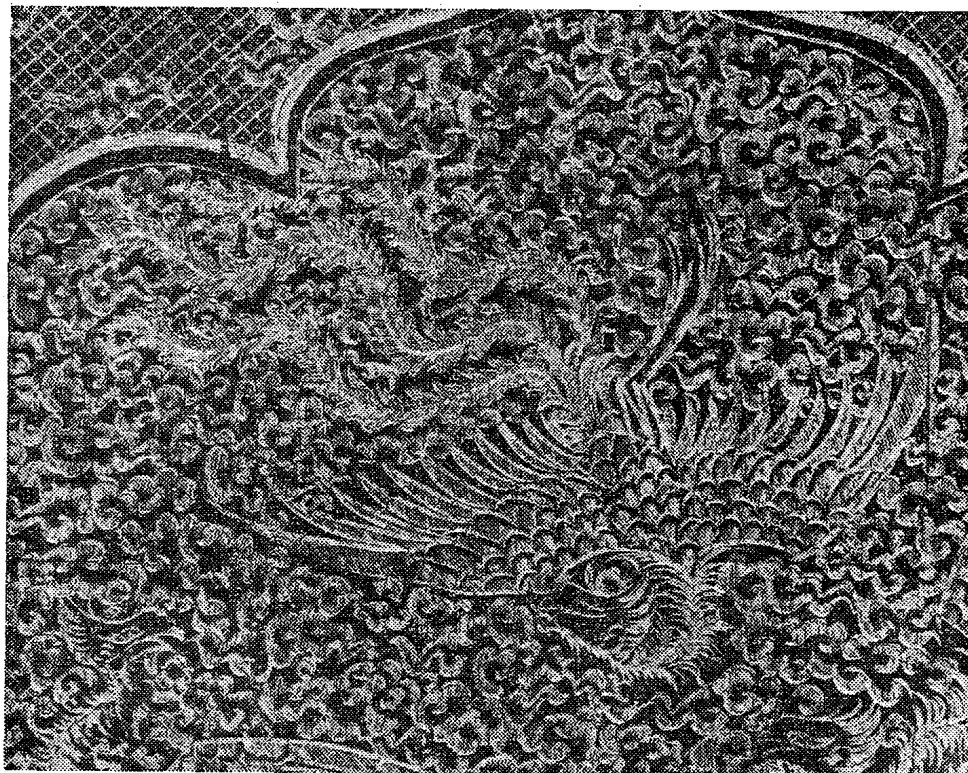
第6図 染付牡丹鳳凰文鉢
(ウイン工芸博物館蔵) 元時代

のA図にあげたスルタナバード窯の鉢のそれに近い。

つぎに挿図六に示した元染付に見える花卉鳳凰文の図は精緻である。⁽²⁵⁾ 大皿の内面に描かれた二羽の鳳凰はまことに克明にえがかれているが、さらに、その地模様をなす牡丹唐草風の花模様も写実的で見事である。このような精描は、コバルトによる彩画技法がとりいれられた結果生まれたものであり、染付の特色でもあって、他の装飾技法の場合はどうていこのように、細かい図柄を描きだすことは困難であろう。四羽の飛鳳をえがいた白磁青花はイスタンブールのトプカプサライ博物館に優品がある。⁽²⁶⁾ いずれにせよ、陶磁器のデザインとして花卉鳳凰文がつかわれたことは、これによってわかる。

花卉双鳳文はひとり陶磁器のみでなく、漆器の図柄としても好んで使われており、とくに南宋—元時代のそれに著しい。図版第一、B図は、鎌倉の円覚寺に伝来した堆朱花卉双鳥文の合子であるが、⁽²⁷⁾牡丹と見える豪華な花模様のなかを、力強い双鳳が飛翔するさまを巧みに現わしている。この堆黒の合子は円覚寺の開山である仏光国師無学祖元が元の至元十六年(一二七九)に渡日したとき将来したものであるから、製作年代も明らかであって、一三世紀の後期を下るものではない。同様のことは、東大寺に伝わる「鳳凰沈金経櫃」についてもいえる(挿図七。⁽²⁸⁾この経櫃はこれと全く同一の手法によって作られたと考えられる鳳凰孔雀沈金経箱⁽²⁹⁾に「延祐二年 抗州油局 棟梁禪正 橋金家造」の銘のあることから、延祐二年(一一三一—五)前後の製作であることは明らかであるが、これには前後の側面に五羽、左右の側面に四羽の鳳凰が細かい地模様状の花文の上に、たがいに後を追うような形式でえがかれている。その花文と鳳凰の組合せの態様はスルタナバード陶器の花卉鳳凰文のそれにすこぶる類似し、両者の間に共通なもののあるのを思いおこさせる。

一三世紀から一四世紀にかけての中国漆器の文様に花卉双鳳文が愛用されている例はその他にも多く、さらには織物の模様としても使われている。



第7図 鳳凰沈金経櫃細部(東大寺蔵) 元時代

このように南宋後半期から元時代にかけての中国では、花卉飛鳳文がすこぶる盛行したのである。

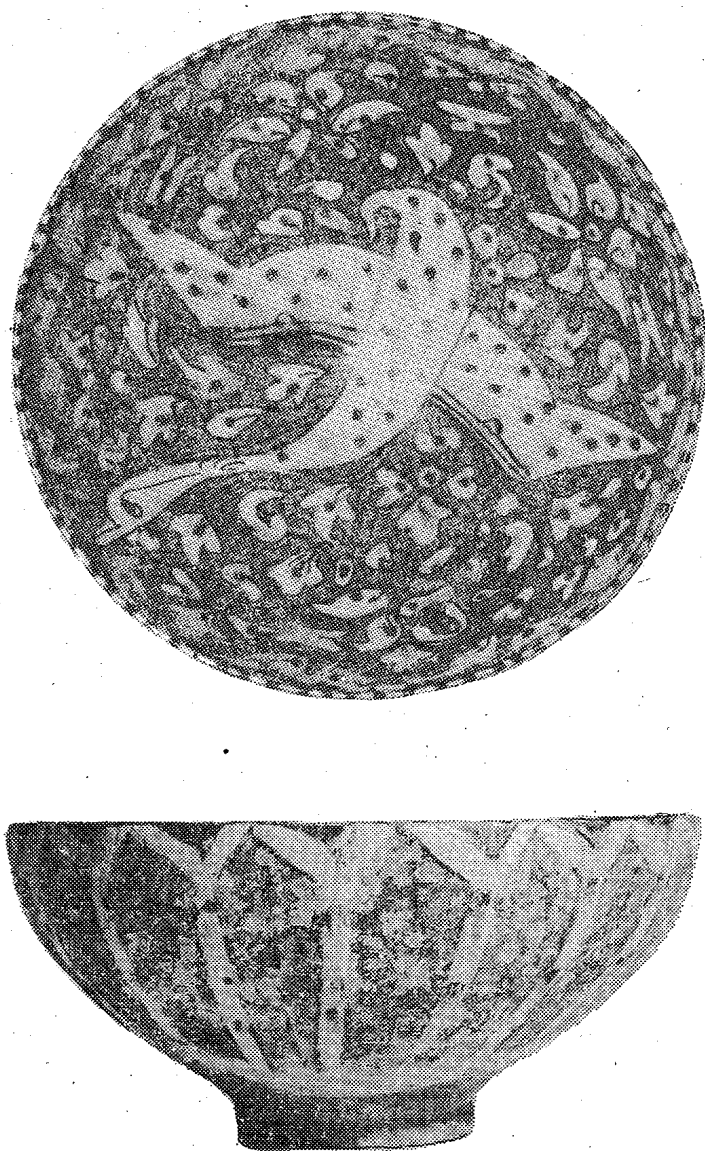
このような事実を知り、また元代における東アジアとペルシアの密接な政治関係を知ると、ペルシアのスルタナバード陶器に見る花卉飛鳳文が、中国の南宋・元代の工芸品にみえる花卉飛鳳文を倣ったものであることは明らかであろう。図版第一、A図にあげたスルタナバード陶器の文様と、図版第一、B図にあげた中国の堆朱の合子のそれ、あるいは白磁黒彩陶磁の模様(挿図5)などをくらべると、このことは一層はっきりとするに違いない。

七

それでは、スルタナバードの盛り上げ花卉飛鳳文が、それ以前のペルシア陶器とまったく関係がなかったかという点、別の角度から、関係はあったともいえる。それは最近ジュベインの遺跡から盛り上げ様式の装飾技法をもつ陶器が発見されたことにもとずいている。

ジョヴェイン(Jovein)はイランの東北部で、ニシャプールの北方にある遺跡であるが、一九六〇年代の後半くらい、ここから独自の性質をもつ陶器が発見された。それはスルタナバードのそれと同じく、青釉と盛り上げ様式の装飾技法によって飾られた一群の陶器である。(挿図8)

ジョヴェインの陶器とスルタナバードのそれは一見たいへん似ているけれども、細かく見ると基本的な相違がいくつかある。ジョヴェイン陶器の素地は、スルタナバードのそれより細かく、砂分も少く、その点で両者はまず違う。つぎに器形では、スルタナバードの鉢に幅広い口縁部をもつものが多いのに対してジョヴェインの鉢は碗形で、口縁は立ちあがったまま素直に終わっている。



第8図 青釉盛上唐草飛鳥文鉢 (ジョヴェイン窯)
13世紀後半—14世紀前半

さらに大きな差違はデザインそれ自身である。鉢の場合。ジョヴェイン陶器では器面一ぱいに一羽の鳥を描きあらわしており、器面を分割してその間に復数の鳥をおさめるようなことはない(挿図8)。また鳥の背景として花文が描きあらわされているが、それはわりあい整った唐草や流麗な草花模様であって、便化して形式化したものはない(挿図9)。興味の深いのは花文を地模様として描かれたジョヴェインの鳥の形体である。これは一〇—一世紀のころニシャプール陶器やアモール陶器で愛された水禽、あるいは孔雀様の鳥の飛翔形であって、ペルシアで愛された伝統的な鳥形である。スルタナバード陶器に見るいさゝか不自然・怪奇な異国風ともいえる鳳凰形ではない。

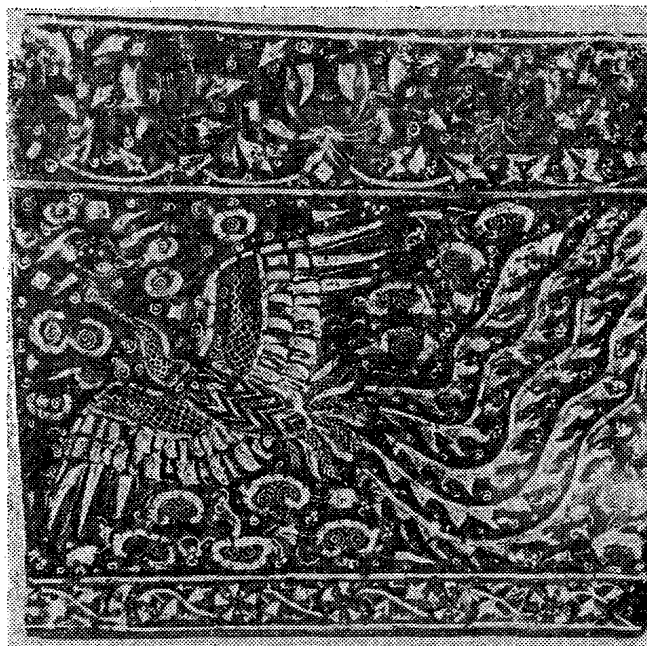


第9図 青釉白盛上唐草飛鳥文鉢
(ジョヴェイン陶器) 13世紀後半—14世紀前半

要するにジョヴェインの陶器は全般的には器形・裝飾技法ともにスルタナバード陶器と同様式である。しかしデザインや器形の点では、後者よりもより写實的、より自然であり、一〇世紀らしいのペルシアの伝統的意匠や、より古い器形と関係がある。

こうした事実を背景にして考えると、ジョヴェイン陶器は、スルタナバード陶器に先行するものであり、前者にみられる盛上様式の鳥形デザインは、まずペルシア人の愛する伝統的な飛鳥形が選ばれたのであろう。ついで、中国から鳳凰形の鳥模様が紹介され、これが東方から渡来した支配者たちの好みにあうのがわかると、首都タブリーズの近くに新らたに築かれたスルタナバードの窯では、ペルシア的な飛鳥形から中国風の鳳凰の飛翔文に変えられたとみるべきであらう。スルタナバードの鳳凰文は、ジョヴェイン陶器の飛鳥文を母体とし、それに中国の宋元時代の鳳凰文を重ねて成立したといふべきであらう。

なお花卉鳳凰文は、スルタナバード窯の盛り上げ様式の裝飾文陶器の独占的文様ではなかった。同じころ、ラスタール陶器やタイルの文様としても採用されているのであって、その例は一四世紀初期といわれるラスタール鉢のデザインや同時代のラジュバルディナ陶器のタイル(挿図10³¹)に見ることができる。



第10図 青地色絵金彩花卉鳳凰文タイル
(岡山学園) 14世紀前半

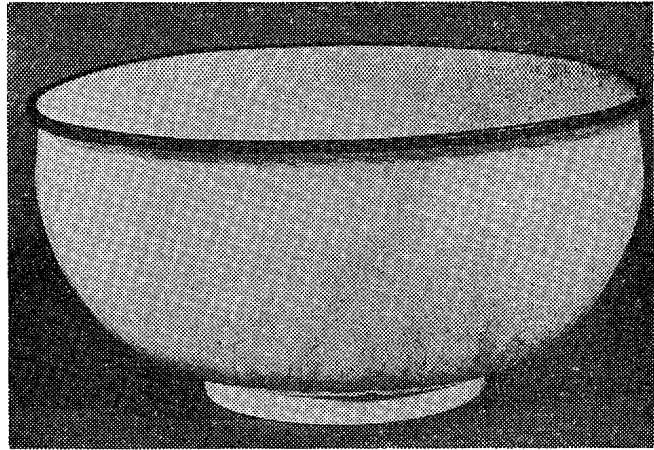
八

スルタナバードの盛上様式装飾の陶器では、鳳凰文とともに、しばしば現われる文様に多瓣蓮花形、あるいは鎬形の文様がある。これは鉢においては外面⁽³²⁾、壺においては胴部のすそに描きめぐらす文様として(図版第二、A図)しばしば使われている。さらにスルタナバード陶器のみでなく、それに先行するジョヴェイン陶器にも現われている(挿図8)。

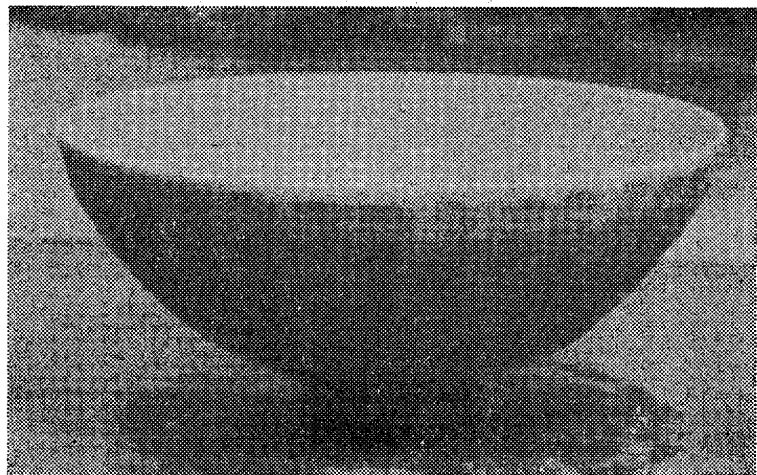
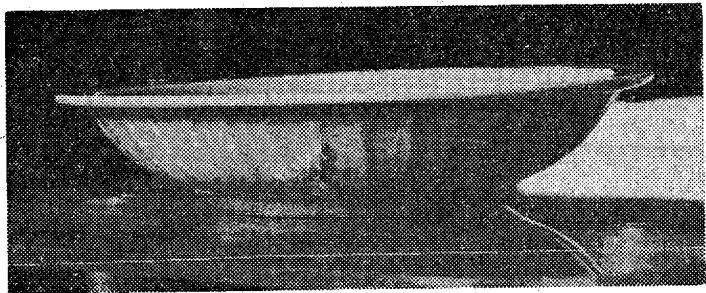
この文様では数多くの瓣の一一の輪廓を白盛上でつくりだし、これを次々につらねて多瓣蓮花形||鎬形とし、鉢や壺の胴下部を飾っている。各瓣の先端は尖るか、または弧をえがいており、そこから縦線が一本、瓣の中央を縦断しているから、各瓣は一層立体的にみえる。

鉢の外側や壺の胴下部をかこむ、このような文様も、それまでのイスラム陶器には現われたことはない。セルジュク時代までのペルシア陶器の胴部は、花文や唐草文、あるいは文字文や幾何文で飾られるのが常である。にもかかわらずペルシアのイル陶器にいたって突如として多瓣蓮花文があらわれるのは何故であろうか。わたくしは、これこそ先にあげた鳳凰文と同じく、一二―四世紀のところ、中国の青磁碗・壺・酒壺などの外面装飾として愛用された浮彫りの鎬模様の採用であり、そのペルシア化に他ならないと考える。

立体的な浮彫りの鎬模様または多瓣蓮花模様は、中国では一一世紀のところから、鉢・碗・壺などの外側の意匠として愛



第11図 定窯白磁彫蓮花文鉢
(ブランデーコレクション) 北宋時代



第12図 青磁浮花模様鎬文浅鉢 (上)
青磁鎬文鉢 (下)
南宋一元時代

用され、青磁・白磁・青白磁につけられた(挿図一一)。そうして一二世紀の南宋時代になると、しだいに様式化され、美しく整えられた浮彫りの鎬模様となる(図版第二、B図)。しかし一三世紀後半から一四世紀前半の元の時代にはいると、この文様はようやく便化され、浮彫りはしだいに影を薄め、一般には刻線をもって各瓣の輪廓をあらわすようになるのである(挿図一二)。この最後の段階の多瓣蓮花文Ⅱ鎬文こそ、様式的にも時代的にも、まさしくスルタナバードの盛上様式の多瓣蓮花文につながる。

このころ、多瓣蓮花文Ⅱ鎬文で飾った中国の青磁は、おびただしい数量にわたって西アジアや南アジアの諸国に輸出された。その数量の多さは、エジプトのカイロ南郊フスタート遺跡から、すでに数千の青磁の破片の出土していることでも明らかである。イランの地にあっても、ニシャプール⁽³³⁾やレイ⁽³⁴⁾をはじめ、一四世紀以前の中国青磁の出土地は少くない。

おもうに、こうして輸入された中国の青磁・白磁・青白磁などの多瓣蓮花文Ⅱ鎬文に刺戟され、かつ新しくペルシアの地に国をたてた東方系の支配者の嗜好をもとりいれて、まずジョベイン窯の盛上蓮瓣Ⅱ鎬文が姿をあらわし、ついでスルタナバード窯に受けつがれたものと思われる。そうしてあるときは、同じく中国風の花弁鳳凰文と組合され、外側を鎬模様で、内側を花卉鳳凰模様で飾り、一層中国風の感触をつよめることに力めたのであろう。



第13図 青地色絵金彩花文把手壺
(ラジュヴァルディナ手) 14世紀前半

一三世紀後半から一四世紀にかけてのペルシア陶器の多瓣蓮花文は、ただスルタナバード窯の盛り上げ装飾様式の陶器に使われたばかりではなかった。イル汗国時代のすぐれた青地色絵金彩陶器であるラジュヴァルディナ陶器の外側をかざるデザインとしても使われているのであって、このことは挿図一三をみればよくわかる。

多瓣蓮花文Ⅱ鎬文はすでにイル汗国時代に、ペルシアの一つの文様としての地位を獲得していたのである。

九

盛上という装飾技法によって描かれたスルタナバード窯陶

器の花卉鳳凰文や鎬文が、一三—一四世紀のころ中国で盛行した同種の文様を吸収し、ペルシア化したものであることは以上に述べたところによって明らかになったであろう。

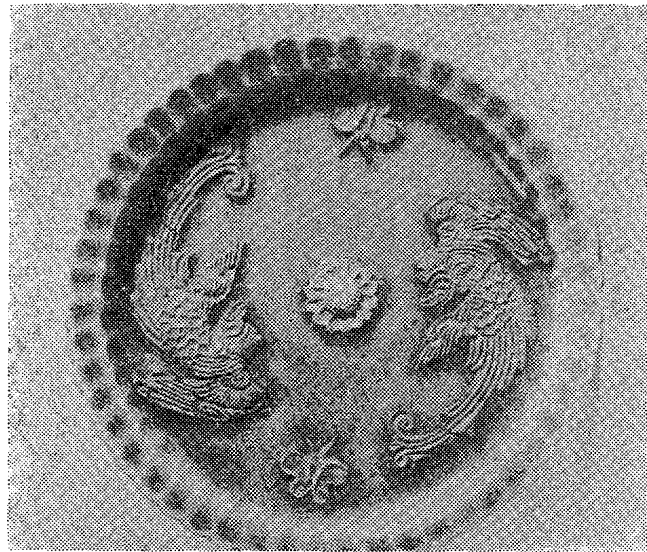
そこでさらに一步進んで追い求めたいのは盛上手法による装飾それ自体のペルシアにおける起源である。

文様を立体的に浮びあがらす装飾技法は、セルジューク時代の一二世紀のころから、何種類かの方法が使われた。その一つは浮彫であり、他は型押しである。これらは装飾面に凹凸をあたえたが、いずれも浅い陰刻であって、立体のコントラストは弱い。また搔落しの技法も使われ、美しい色彩のコントラストをもたらしたが（ガブリ手や影絵手）、これもまた陰刻の部類にはいる。盛り上げ技法により、文様を意識的に浮びあがらした装飾は、中期第一のセルジューク陶器時代にはなかったのである。とすれば、この技法は一三世紀後半になってはじめて姿をあらわしたことになる。それではどうしてこのときに至って突然この技法が使われるようになったのであろうか。ここで再び思いおこす必要のあるのは、一三—一四世紀、中国で盛行した浮模様の技法である。

白土を使って模様を盛りあげ、優雅で力強い立体感をよびおこさせるこの技法は、このころとくに青磁に多くつかわれている。その文様には牡丹唐草（挿図一四）・花卉双魚はもとより、鳳凰（挿図一五）³⁸などをも含んでいる。牡丹唐草のものなど現在、浮牡丹文青磁などと呼ばれ珍重されているのである。そうして一三—一四世紀においてもこの様式の青磁は貴重とされ、これまた西アジアの諸地域に輸出された。東北イランのジョヴェインの地方にもたらされたことはいまでもなからう。当時、ペルシアはイル汗国の治下であって、支配層たちは東アジアの文化の吸収に熱心であった。陶器の世界でも東アジアで愛されたデザインの吸収・消化が行われていたことはすでに述べた通りである。とすれば、同一時期に行われた中国の特長的装飾技法である浮模様の技法が注目されない筈はない。このようにして、中国風の浮模様が、ペルシアの地にうつし植えられ、一三世紀後半から一四世紀前半にかけてのペルシア陶器の代表的技法の一つとなった盛り上げ



第14図 青磁浮牡丹文蓋物（静嘉堂蔵）南宋時代



第15図 青磁浮鳳凰文盤 元時代

技法になったのではなからうか。そうしてこれを最初にうけいれた窯場が東北イランのジョヴェインであったと思われる。碧青色の青釉の下に、鳥や花卉模様が白く浮きあがっているジョヴェイン窯の盛上様式の陶器は、まさしく中国の浮模様の青磁を想いおこさせる。

ジョヴェインで吸収され、そこで新たにペルシア的な形をととのえたこの装飾技法は、ついでスルタナバード窯にも広がった。そうしてここでは中国風の花弁鳳凰文や鎬文も使われ、より中国風な感触のつよいスルタナバード窯の青釉盛上形式の陶器となったものと思われる。

盛り上げ装飾技法と花卉鳳凰文、それに鎬文の三者は、その点、起源を一つにするものであり、また中国において一つ

のまとまった組合せをもったものが、そのままペルシアに移植されたものと見ることが出来る。たゞペルシアにおいてはこれらのまとまりは分解され、その一つ一つが適宜に使用された点に興味がある。

一〇

イル汗国時代のペルシア陶器の部門の一部では、このように中国的なものが移植され、吸収され、やがてそれはペルシア化された。

このような中国的要素の吸収の問題がイル汗国時代の陶器全体から見た場合、どのような比重を占め、どのような意味をもつか、これは突きとめなければならぬ問題である。

また工芸史の上から見た時、陶器の世界におこったこのような状態が、他の工芸とどのような相関関係をもつかも確かめなければならぬことである。

さらに、どのような性質の工人の集団が、この中国的技法の色濃い陶器の生産に従ったか、あるいはそれを製作するに至った社会・経済的背景や、それがイル汗国の社会に与えた影響なども知りたいのであるが、これらは将来の問題として残すことにし、いまはただ事実のみを提示してこの稿を終る。

註

八一五〇に述べた。

(1) その間の事情は三上次男「ペルシアの陶器」(中央公論美術出版)第二版、頁二〇―二二に述べた。

(3) これらのイル汗国時代の陶器については前掲「ペルシアの陶器」第八章、頁一六七―一七七に述べてある。

(2) これについては前掲書第五章頁八六―九二。および三上次男「ペルシア陶器の美」(出光美術館刊平凡社)第一〇、頁四

(4) この鉢の詳細については、三上次男「図録ペルシアの陶器、正」第一五三図版および頁七四の解説参照。

イル汗国時代のペルシア陶器に現われた中国的裝飾と裝飾技法について

(四三)

四三

- (5) この壺の詳細については前掲「図録ペルシアの陶器、正」第一五五図版および頁七五の解説。類似の壺は Treasures of Persian Art after Islam, The Mahboubian Collection, no. 346 にのみみえる。
- (6) 前掲「図録ペルシアの陶器、正」図版第一五四および頁七四一五の解説。
- (7) Arthur Lane, Later Islamic Pottery, 1950 London Pl. 4.
- (8) Charles K. Wilkinson, Iranian Ceramics 1963, New York, Pl. 73.
- (9) A. Upham Pope, A Survey of Persian Art, Vol. X Pl. 780A.
- (10) A. Upham Pope, *ibid.* Vol. X. Pl. 780B. ブリジストン美術館蔵の広口の深鉢の内面の文様も一羽の飛鳳である。
- (11) A. Lane, *ibid.* Pl. 2, B.
- (12) A. Lane, *ibid.* Pl. 2, A.
- (13) A. Lane, *ibid.* Pl. 5, A.
- (14) 三上次男「図録ペルシアの陶器、続」図版一八五。
- (15) A. U. Pope, *ibid.* Pl. 779A.
- (16) A. U. Pope, *ibid.* Pl. 779B.
- (17) 「図録ペルシアの陶器、続」図版一八六。
- (18) 漢時代以前の鳳凰文については、林巳奈夫「鳳凰図像の系譜」考古学雑誌五二巻一号。
- (19) 法隆寺献納御物の中にふくまれる鍍金蓋付水滴の両側面にそれぞれ花卉の中に遊ぶ一羽の飛鳳があらわされている(東京国立博物館「法隆寺献納宝物目録」(昭和三九年)八一図。ただこれが中国製か日本製かについては
- (20) 同様の模様は東京国立博物館蔵の三脚盤にも見える(世界陶磁全集巻九、隋唐篇、図版八一)。
- (21) 陳万里「越器図録」図版四〇・四二・四三・四四・四八など。
- (22) 「世界陶磁全集」第一〇巻、宋遼篇、図版七七。
- (23) 「世界陶磁全集」第一〇巻、宋遼篇、頁二〇七、挿図五一。
- (24) Cleveland Museum of Art, Chinese Art under the Mongols. Pl. 47. Collection of the Royal Ontario Museum. なお同書図版四八に見える德利型の絵高麗細頸瓶(Collection of Miss. Ruth Dreyfus)の胴部にも花卉鳳凰図がえがかれている。
- (25) Oesterreiches Museum für Angewandte Kunst, Aus den Sammlungen des Museums, Wien 1958. Pl. 155.
- (26) John A. Pope, Fourteen Century Blue and White. (Washington 1952), Pl. 11.
- (27) 三上次男・山辺知行・岡田譲「東洋美術」(朝日新聞社刊)第六巻工芸篇図版第四八、および頁四八―九解説。この書には「牡丹孔雀堆朱香合、南宋」となっている。
- (28) 前掲「東洋美術」第六巻、図版五三、および頁七三解説。

- (29) 前掲「東洋美術」第六卷、図版五二、および頁七二解説。
これにも左右の側面に二羽の鳳凰があらわしてある。
- (30) Arthur Lane, *Early Islamic Pottery*. London 1947.
Pl. 65C.
- (31) 「万国博美術展目録」二、東西の交流、第六九図。岡山学
園コレクション。
- (32) 挿図1の外側面(「図録ペルシアの陶器、正」図版一五四
および頁七四―五の解説)。
- (33) ニシャプールからは鎬文によって飾られた美しい竜泉窯の
青磁碗が発見されている(石黒孝次郎氏蔵)。
- (34) 三上次男「陶磁の道」(岩波新書)六、「ペルシアにもたら
された東方の陶磁」参照。
- (35) Cleveland Museum of Art Chinese Art under the
Mongols. Pl. 78. (Percival David Foundation.)